
なつけない猫の葛藤

柊 苑果

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なつけない猫の葛藤

【Nコード】

N6944F

【作者名】

柊 苑果

【あらすじ】

行きつけの小さなバーで逆恨み男に殴られた曾谷雅巳を助けたのは、ヤクザと見まごう強面の男、堂園巽。縁が重なりバーのマスター三条弘海とも友好を深めるが、この大人たちは一癖も二癖も持ち合わせた変わり者どもで…。意地っ張りのコドモとろくでなしで個性的なオトナ×2の不思議な三角関係^{になるといいな}。大学生と社会人と社会人？のお話です。ハッピーエンド予定。

第1話（前書き）

この話のみ少々暴力行為をふくみます。

どのような事情があつたにしても、暴力は犯罪です。
暴力行為の推奨は一切いたしません。

その他、少々暴言をふくみますので気分を害される可能性があります。

申し訳ありませんが、言葉遣いが悪い文章を読むと気分を害される方はお控えください。

終の品性は疑わないで下さるとありがたいです。

第1話

「お前もこれぐらい知つとかなきゃ都会の男とはいえねーよ」

なんて先輩に首根っこ掴まれて連れて行かれたオトナの飲み屋は、おねーさんが席に付いて水割りを掻き回すようなオトナさではなく、木製のドアにカウベルの柔らかい音色が向かえてくれる、狭い店内に2つの4人掛けテーブルと6つのカウンターがあるだけの小さな飲み屋だった。

狭い割に酒の種類は豊富らしく、バーテンダーの向こうに並ぶ酒瓶が天井ギリギリにまで達しているのはかなりの圧巻で。

安心と、ちよつとはあつた期待が外れたことに小さく息を吐いたのが半年前。

今まで行つたどの居酒屋とも違い、とても静かで、おだやかな空間を楽しめるオトナの憩いの場になっているその店は、いつ行ってもカウンター半分とテーブルが埋まる程度の賑わいで、寂しくもなく、うるさくもなく、丁度良い距離感をたもっていて。

大学では必ず人の輪の中にいる俺だったけど、それが楽しいと思つてたけど、本当は、結構気を使つていたんだって、初めて知ることが出来た。

それから、そのバー（飲み屋って言ったらマスターにいらまれた）がおれのフェイバリットスペースになつただけだ。

カウベルがコロンと鳴った店に入って早々、力ずくで連れ込まれたのは、中々きれいにしてある個室1つに小用1つのこじんまりとしたトイレ。

背中を突き飛ばされて、小便器にしがみつくようにしてタイル張

りの床に倒れこんだ。

振り返ると、歳はそう変わらないハイティーンの『悪ぶってます』感満載の顔が3つ。…やべ、1つ心当たりあるわ。

そう思ったときには、その心当たりクンがおれの横っ腹に遠慮一切なしの蹴りを見舞っていた。

「げくっ」

ミシるアバラに息を止めてこらえると、あざける笑いの2重奏が耳に届いた。

「ゲグ！だつてえゝちよゝうける。ベラベラ喋るウザイ口から、げく！だつてゝ。聞いた？」

「ひゃひゃ、あほくせえ。ストライク！ってことなんじゃねえの？

…おい、なんか言ってみるよ」

ばか笑いする男と、頭をつま先でガツガツ蹴ってくる男、両方へ平等に腹を立てつつ、唯一憎しみで見下してる…見覚えも心当たりもある男に向かつて、おれは顔を上げた。

「…は、てめえのは逆恨みってんだよ。あははどっちだ。…因果応報ってやつだよ。リカが離れてったのはてめえの悪行のせいだつての。悔い改めるよ。おれにいくら当たってもムダだつーの」

「人の女呼び捨てにしてんじゃねーよ」

見下す目の色には、本気の憎しみ。

…ああチクシヨ。わかつてたよ。この手の類が簡単には引き下がらないってことは。

「てめえが色々リカに触れ込みやがったから、リカが別れたいなんて言い出したんだ。殴っても蹴っても言うこと聞きやしねー。絶対別れるとか訴えるとかさー。冗談じゃねーっての…てめえのせいだ。てめえがおれの女奪おうってんだろ」

「…リカは前から暴力ふるう男は願い下げだつたつてよ。女相手に暴力ふるう男はサイテーだよなって言つてやったら泣いて頷いてたぜ。…自業自得って習わなかったか？小学校で」

「何いってんのコイツ。ガツコのセンサーかつての」

「いうこと聞かねー女の方が悪いんじゃない？殴られなきゃわかんねーのは悪くないんですかー。ぎやはは」

どつという関係かは知らないが、下劣さは同格らしい腰ぎんちゃくの汚い笑い声を無視して、俺はまっすぐ見下ろしてくる物騒な目線に睨み返す。

「人の女に手え出したらどうなるかはわかってるよなあ？」

言葉と共にこれ見よがしな指鳴らしのパフォーマンスに、げんなりしながら腹筋に力をこめた。

そんなの今時小学生でもしねえつつの。っーかトイレでボコるってなに世代よ？

暴力男だつて聞いてたけど、喧嘩慣れしてるわけでもないらしい。ホント、転がった人間と女にしか手を上げられないサイテイ男だつてワケか。

深くつきたいため息をなるべく細く吐き出して、おれは相談に来ている間中泣き通しだったリカの青あざの痛々しい横顔を思い浮かべた。

リカ、別れるって言えて本当によかったな。頑張ったな。どれだけ殴られたのか。蹴られたのか。ひどくなつてなきやいいけど。頑張ったんだな。えらかったな。

じゃ、おれもふんばらねえと。こんな奴に致命傷なんか食らったら、ホントにバカだ。

「フラレ男の八つ当たりにつき合つてやる気はねえよ。心入れ替えて他の女捜すんだな」

「…いまさら土下座されても許す気なんかねーけど、やっぱり腹立つわ。おまえ」

「殺っちゃう？おれもコイツすつげー氣にくわねーし」

「はは、理由なんていんじゃない？ぶつ殺せば？」

…気安く物騒な単語を並べてくれる。

悪趣味な子供じみたやり取りに恐怖なんか感じもしないけど、その言葉が持つ意味合いにブルっと体が震えた。

それを見て、あざけるように笑う奴らが気に入らないけど、こんな体ばつかしかいガキみたいな奴等と対等に成り下がる気はこれっぽっちもない。

ひどい癖毛の髪を掴まれて上向きにされるのと同時に、奥歯を噛み締めた。

「いいさ。殴られるのには慣れてんだ。

一瞬浮かんだ痛みへの恐怖を、強く目をつぶってやり過ごす。

大丈夫。死にやしねえ。

すぐやって来た痛みは、恐れたほどではなかった。

どれほど時間が経ったか。

痛みよりも、それに備えて力をこめ続ける筋肉が悲鳴を上げ始めた頃。

「……おい、次がつかえてんだ、用を足さねえんならサッサと空ける」
この場に似合わないセリフが、不機嫌な声で現在進行形な暴行現場に掛けられた。

「あ？ なんだよ、取り込み中だよ見りゃ分かるだろ！」

「見れば用を足してねーみたいだから、よそ行ってやれって言うてんだろ。耳悪いのか、それとも頭悪いのか？」

ン？ としゃくったような、ドスの利いた低く響く声に、暴力に酔っていた男達の手が止まった。

恐る恐る頭をかばった手の隙間から見上げると、3人組の背中の向こうに人影がチラチラと見える。スーツの肩とツンツンな短い髪の毛。

体格は標準値を超えているらしく、当然今この場では飛び抜けて強そうに見える。

「便所なら別の店行けよクソじじい！」

フラれ男が負けん気でがなるのを、両脇から慌てた目で凝視する

滑稽なコントを見てみると、その向こう側から低い低い、ちつとも笑えない笑い声が胸にまで響いた。

「口の聞き方には氣いつけるよ坊ちゃん。今度はてめえが顔面でトイレ掃除するか？」

楽しげな口調が怖いと思ったのは生まれて初めてだった。

その男は本気で実行するつもりで、そのことを楽しんでいるようなのだ。悪趣味だが、強い。

それを同じく感じ取ったのか、左右の2人が慌ててトイレから出ようとあがいた。

「お、俺もう飽きたからいいわ。じゃあな」

「俺も……」

入口に居る男を避けてコソコソ去って行く後ろ姿に、内心ケツと吐き捨てて、まだ男とにらみ合っている最低男をうつすら見上げた。
「……さて、どーすんだ？オトモダチは泡食って逃げ出したみたいだが」

「……うつせーなクソじじい……てめえこそ、こいつの二の舞いにしてやる……」

ヤケクソに叫んだサイテイ男の蹴りが、不意に眼前に迫った。

「クソ、バカが！」

ガツンと食らった衝撃にブラックアウトしたのはその直後だった。

第2話

じくんじくんと鼓動を刻む、身体のおちこちから響く違和感に意識が引き寄せられる。

「ちくしょ、いてえ…」

ポツリと吐き出した泣き言で目覚めると、そこは硬いトイレのタイルではなく少し柔らかい台の上。

不思議に思いつつ辺りを見渡すと、そこは薄暗い間接照明が照らし出す見慣れたバーの店内で…！

「！…いつつ…」

飛び起きようと上げた頭がズキンと痛んで、恐る恐る横になる。が、急に動かした衝撃は波紋のように頭の中を響き渡った。

両手で頭を抱え込み、押しつけるようにして痛みを堪えると、晒した首根っこに冷たいものがベチと触れた。

「ひっ！」

「お、意識あったか。良かったな、大事には至らなそうだ」

頭上から掛けられた、ダムではないが遠慮ない大声に、また頭痛の波紋が落とされる。

「…、ちよつと、黙れ…」

怖々声を出すと、頭上の男は「ん？」と聞き返してから豪快に笑い出した。

「んな口利ければ上等だ。おら、濡れタオル。痛むところ中心に冷やしとけ」

大声の主は、首筋に温められたタオルを取り上げて一振りすると頭を抱える手の上に載せてきた。

それを掴んでおでこに押しつけると、少しだけ痛みが弱まった気がする。

あと痛みが激しいのは、肋骨辺りと脇腹と…。

「背中と太股は目立つ痣ができるだろうな。腹と脇腹はそうでもないだろ。あとは肩に異常がねえかだ。起きれるようになったら回しとけ」

自分の状態を意識だけで確認していると、男はちょうど良く手短かに説明をくれた。

自己判断には自信がないから、そう判断を下されて安心の息を吐く。

「いやいやダメだ。これだって素人判断には違う。鵜呑みにしては後がまずいかもしれないし。」

思い直して、身体の痛む部分に意識を集中させる。

「おい、ボウズ。起きてるか？」

投げやりなその声に力チンときた。

「ボウズじゃない。曾谷雅巳って名前の個人だ」

そう言い切ると、ブツと噴出す音に続いて遠慮なしのバカ笑いが降って来た。

「ぶははははは！個人か！そうだなこんなトコ出入りしてんだからオトナだよな！はははは個人で主張されたな初めてだ！」

「ち…声でさえよ…いてえ」

頭に響く笑い声に、食いしばった歯の間から文句を言うと、男は引きつったような声に笑いを変えた。

「わりいわりい。聞いてた話と随分違ったんでな。んで、どうだ？起きられるか？」

笑いながらののきな言い方にまた力チンと来た。

心配してんのかからかってんのか、どっちにしても腹が立つ。

「アンタがさっきから頭痛悪化させてんだけど？」

イライラを目一杯込めてそう言い捨てた。…顔を見る勇氣はなくて俯いたままだったけど。

「俺はアンタじゃなくて、巽だ。堂園巽って一人だよ」

にやりと声を笑わせながらの自己紹介に、またイライラと腹がざわめく。

「真似すんな」

「お前に合わせたんだよ。そうピリピリすんな。…おい、三条！ガキア起きたぜ。かなりピンピンしてる」

奥に呼び掛ける声に、まだ人が居ることと、その相手に思い至って、今度こそ飛び起きた。

カウンター脇の従業員扉から顔を出したのは、この店のオーナー兼バーテンダーの…。

「三条、こいつ案外荒事慣れしてるみてえだぞ。打ち身と痣だけ。

…頭も、大したことな」

「すみません！店に迷惑かけて…」

堂園の話を遮る形で頭を下げて謝罪すると、頭上で苦笑が行き来した。

「…ほらな」

「そうみたいだな。まあ傷害事件に発展しなくて良かった。…相手は刃物を持ってなかったのか？」

「出してこなかったとこ見ると不所持だったんだろ。ま、ガキ同士のケンカで刃物出してくるようなら、アイツら無傷で帰してねえよ」

そんな言葉と共にあざ笑う堂園と冷静に受け答えるマスターのやり取りに、改めて2人を見上げた。

目の前には、見慣れたマスターのスラリとした細身の長身と、並より上の筋肉がスーツの上からも見て取れる大柄の男が並んでいた。さつきトイレで見たのとおんなじの、ツンツンの短い髪の毛がっしりと筋肉の付いた大きな身体に、キツイ目付きが普通の表情でも睨んでいるような印象になるその剣呑さで、その存在の異質さを物語っているような男。

ぶっちゃけヤ。ザみたいな風貌の男なわけだけど。

マスターのこと、三条…って呼んでたけど、知り合いなんだろうが。

ヤ。ザとバーテンダーっていうと、知り合いでもおかしくはない気がするけど、ここのマスターには似合わない気がする。

じつと2人を眺めていると、マスターが腰をかがめてのぞき込んで来た。

「曾谷、身体は大丈夫か？」

ほろおもて
細面の美形に近くから尋ねられて、不意に鼓動が強く鳴った。

「あ、だだ、大丈夫ですよ。あいつら大したことなくて」

マスターの顔が黄金率つてくらい整ってるのは知ってたけど、間近で見た時のダメージには気付かなかった…。

『こんな薄暗い店内でなかったら、この店は女性客で毎晩行列ができてるんじゃないだろうか』

そんな事を思いながら無意識に後ずさっていたらしく、いきなり手がスカツと空を掻き、後ろに倒れた。

「うあ！」

落ちそうになつてばたつかせた手が誰かにしっかりと握られ、思わず握り返す。

「おいおい大丈夫か？」

引かれて戻されたのはイスを並べた簡易寝台で、ずれた足下のイスをマスターが戻してくれているのが見えた。

「あ…すみません返すがえす…」

「いや、悪かった。いきなり顔が近くて嫌だったろう？」

「いえ！そういうわけじゃ…」

不快だったわけではなくて…となんとか釈明しようとした耳に、押し殺した低い笑いが響いた。

「おい三条、あんまりからかってやるなよ。ボウス本気にしてるじゃねえか」

と言われたマスターは少し振り返った横顔で口許だけを引き上げた皮肉げな笑顔を浮かべた。

「人間きが悪いな。そんなつもりは毛頭ないんだがな。彼は気の弱い所があるから、気を害したのではないかと本心から詫びただけだけれど？」

「そんなに弱い質にや見えねえが。…てめえにかかりや気弱の好青

年だわな。この腹黒」

「本当に人に聞かせたくない口をきく男だな、お前は。報酬から悪口分差し引くぞ」

「わ、待った！それは勘弁。お前、自分が言った事には筋通せよな！」

「筋は通しているぜ。お前が自分の首を絞めているだけだ」

「フンと鼻での冷笑を加えたマスターに、堂島が頭をガシガシと掻き回してからその頭を乱暴に下げた。

「ちくしょ。わーったよ！俺が悪かったから差し引きは勘弁な、弘海ちゃんよ」

「それでも憎まれ口は叩くんだな。と感心してしまうくらい、多分マスターが嫌がるんだろう呼び掛けをして、マスターは額に青筋を浮かべんばかりに嫌そうな顔で堂島を睨みつける。

「…本当に腹立たしい男だな。では減らさん代わりにもう一働きして貰おうか。彼をうちに送ってくれ」

「…俺？」

マスターを見ると、表情を和らげてこちらを見ていた目とバツチりあってしまい、また俯いた。

「うち…って、てめえんどこか？」

耳に届いた堂島の声には、明らかにその先をマスターの家かと尋ねていて！

「ばっ、まっ」

「そっだが？」

「バカまさか！と言いたかったセリフにかぶって来たのは、まさかのマスター本人の肯定で…」

「はあああああ？？」

とアホめいた大声を上げた俺を、2人は少し目を丸くして見下ろしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6944f/>

なつけない猫の葛藤

2010年10月9日05時47分発行